

「清院本 清明上河図」における土木景観の分析*

A Basic Analysis of Landscape on “Qingming Shanghe Tu, A Work in Qing Dynasty”

横松宗治**

By Muneharu YOKOMATSU**

1. はじめに

「清院本 清明上河図」¹⁾ (以下「本図」または、「清院本」と略すこともある)は、清王朝第6代乾隆帝の勅命によって、1736 (乾隆元) 年に描かれた。宮廷に属する5人の画家陳枚 (ちんばい)、孫祜、金昆、戴洪、程志道による奉勅画である。12世紀初頭の「宋本 清明上河図」(以下「宋本」と略すこともある)を規範として後世約40本の画卷が描かれたが、本「清院本」はその中で白眉である。台北故宮博物院に所蔵されている。

本論文は、先の土木史研究発表会での拙稿「宋本 清明上河図における土木景観の分析」²⁾、全国大会での「画卷「宋本 清明上河図」の都市景観の展開」³⁾に続く清明上河図研究の一部である。前2論文では規範となった「宋本」を分析したが、本論文では、「宋本」より600年余後に描かれた「清院本」を対象とする。そこには田園、汴河、都市近郊の街、城内の賑わいなど規範に沿ってはいるが、北宋末と清最盛期という時代の違い、画家の目の風景が開封と北京という都市風土の差などを読み取ることができる。写真資料などのなかった時期の都市景観の復元には、画卷の果たす役割は大きい。

2. 「清院本 清明上河図」が描かれた時代と都市

(1) 清朝乾隆帝の時代

清朝成立 (1644年) から約100年後1735年に即位し、その60年間の在位期間は、国土は中国史上でも最大の版図を得た。即位当時1億人足らずであった人口は乾隆帝末期には3億人を超え、当時の世界の人口の三分の一を占めるに至った。

清朝は長城の北の満洲族であったが、古来の漢族の文化を引き継ぎ発展させた。

(2) 乾隆帝期の都市

産業は、明末の混乱から回復し、特に商業の隆盛は都

市の繁栄をもたらす。蘇州の繁栄を描いた「盛世滋生図」(徐揚作、1759年)や、江南都市を描いた「乾隆帝南巡図」などを通じて、都市経済の高揚、特に飲食、服飾、芝居などはまさに爛熟の域に達していたことが想像できる。

3. 「清院本 清明上河図」の構成と土木景観

本図は、高さ35.6cm、長さ1152.8cmという長大なサイズの画卷 (絵画の巻物) である。北宋期の首都開封と汴河を中心に都市・田園景観を描いたものであるが、大きく4シーンに分けることができる。

(1) シーン1. (図-1)

右端の巻頭から田園風景が始まる。画卷の主題である汴河が画面中央を左右に流れる。汴河は淮河と黄河を繋ぐ運河であるので、右端に広がる大河は淮河であろうか。この時期、汴河はすでに大運河の地位を失っていた。

汴河手前側には、農村の中では比較的大型の集落が立地する。大地主、士大夫クラスの邸宅も城外に立地しているのは、乾隆期の社会の安定を表すのであろうか。春を告げる清明節を彩るさまざまな野外活動の中に、野台戯では芝居が打たれている。

田園風景に見られる地形は、中国華北の黄土の大地を思わせる。乾燥し、いかにも軽く、少しの降雨でも流動するが、しかし栄養分に富んでいるので畑作は豊かである。雨の少ない華北特有の、畦道が幅広く、耕作地は深く掘り込まれている畑地である。

(2) シーン2. (図-2)

虹橋付近から城門までは城外の街であり、その中には河船が停泊し、荷揚げが行われている港もある。

本画卷の中心景は虹橋である。橋上両側にはびっしりと店舗が並ぶ。ヴェネツィアのリアルト橋 (15世紀建造) をはじめ、近世の橋は商取引の場でもある。

軍事訓練場が見える。この時期、なお北方、西方での異民族との紛争が続いていた。都市の郊外ではこのような風景が見られたのであろう。

画面の半ばが水面である。開封近郊は、大河黄河と汴

*キーワード：景観、土木史

**正員、株式会社日本ランドデザイン

(〒163-1329 東京都新宿区西新宿 6-5-1、TEL03-3346-2233、yokomatsu@landdesign.co.jp)



(左) 図-1、画卷の右翼；シーン1



図-2、2 段；シーン2



(上) 図-3、画卷の3段；シーン3



(左) 図-4、画卷の左翼；シーン4

河などの運河は発達しているが、このような“水郷”ではない。この風景は明らかに江南のものである。北京の画家が、“南”の開封を想像して描いた結果、その想像ははるか南にずれてしまったのだろうか？それにしても、「乾隆帝南巡図」の中では正しく江南を描いた同じ宮廷画家であるので、あるいは変転極まりない黄河下流域にはこのような風景もあったのかも知れない。今後の課題である。

(3) シーン3. (図-3)

「宋本」についての拙稿²⁾では、とりあえず“鼓楼”とした建築は、ここでははっきりと城門である。城門を通過するときだけは“右側通行”である。他の箇所ではこのルールは見られない。水路上の河船も、「宋本」ほどの明確な航路ルールを見出せない。

城門から入ると城内の大型の整然として街並みが見られる。街路は極めて広く開封の中央通り「御街」を彷彿とさせる。建築はどれも本瓦葺き、街路に面して平入りの商店にはあらゆる業種、豊富な品揃えがそろろう。

商街から少し離れたところには太湖石と池泉をもつ大臣クラスの邸宅が見える。

(4) シーン4. (図-4)

そしてその街並みの左端にはまたしても城門がある。ここから内側は市民が容易には入りえない宮城であろう。

先に分析対象とした「宋本」では、この宮城部分は描かれていない。拙稿²⁾では、画卷の左右対象性を仮定し、作成時期には宮城部分が存在したが、その後切り取られたのではないかと推測した。「清院本」では、まさにその宮城と思しき広大、豪華な宮殿、山水が描かれている。北宋期の開封の「金明池」として分析もあるが⁴⁾、乾隆帝期以前に造成され、乾隆帝によってさらに拡張された北京北西の「円明園」を範に描かれた庭園であろう。

4. おわりに

「宋本」と比較し、この「清院本」に関する既往の研究・著書は筆者の手元にはほとんどない。“規範”と“模本”との違いであろうか？「清院本」を所蔵する台湾で丹念に探せば研究論文にたどり着くのかも知れないが、それでも建築単体、風俗に関する研究などに限られるであろう。

本論文を書き始めるきっかけは、両「本」の比較であったが、600年を隔てて都市景観が変化し、いわゆる進歩するのは当たり前であるので、その視点は外し、“開封郊外と汴河の風景を、北京の作家が規範を見ながら（そして想像して）現代化して描いた”そのズレに注目した。

「清明上河図」研究の本来のテーマである、“歴史的都市の景観の復元”にはまだまだ遠い状態である。

参考文献

- 1) 「清院本 清明上河図」原本は、台北故宫博物院に所蔵され、絹本設色のため公開されていない。本研究には、台北故宫博物院発行の縮小コピー「清院本 清明上河図(巻)」を使用した。
- 2) 土木史研究委員会：「土木史研究講演集, No. 27」, 2007. に掲載予定(本論文投稿時点では未定)。
- 3) 土木学会全国大会講演第IV部門：「画卷「宋本 清明上河図」の都市景観の展開」2007. に掲載予定(本論文投稿時点では未定)。
- 4) 袁旃他編：「清明上河図の話」, 国立故宫博物院(台北)出版, 1999.